

令和6年度 学校評価報告書

学校教育目標		自他のよさを尊重し、豊かな心と健康な身体をもち、主体的に学び合える児童の育成		重点目標		◎よく聴き、しっかり考え、行動できる子供の育成 ○最後まで話を聴いて、自分の考えを書き、説明できる子供 ○認め合い、助け合うことができる子供 ○自分のめあてに向かって努力し続ける子供					
評価計画				自己評価		学校関係者評価		改善計画			
重点目標		目標達成のための方策(取組指標)		成果指標		結果(成果○と課題△)		コメント		次年度における改善策(案)	
重点目標に関する評価	最後まで話を聴いて、自分の考えを書き、説明できる子供	① ② ③ ④	自分の考えを図や言葉等でノートに書き、根拠や理由を明らかにしながら説明できる授業づくりをする。 「みなとタイム」の計画的実施と「タブレットドリル」等の教材活用、指導体制づくりを推進する。 総合的な学習の時間(海洋教育、防災・減災教育)では、PDCAサイクルを機能させながら子どもの思いを大切に体験的活動を取り入れる。 家庭学習の習慣化を図るために、個に応じた目標や「家庭学習強調旬間」を設定する。	○標準学力調査の結果 前年度と同等か+1P以上 ○市販テストの期待得点以上の児童数 70%以上 ○市販テストの期待得点以上の児童数 1人以上増加 ○「授業チェックリスト」における授業者の成果評価 平均3.0以上(4段階) ○「児童アンケート」の成果評価 平均1.4以上(2段階) ○アンケート「海のことについて調べて考えたことを他者に伝えることができた」(担任の見取り)80%以上 ○「児童アンケート」の成果評価 平均1.4以上(2段階) ○家庭学習カードの自己評価で「自分から進んで家庭学習に取り組んだ」と回答する児童 80%以上	4 3 3 3	○算数科の学習で自分の考えをつくる時間を設定し、それを使って友達に説明する取組をどの学級でも行うことができた。 ○5年と4年で習熟度学習を推進できた。 ○「みなとタイム」で、タブレットドリルに取り組み、自主的に子供が学力向上に取り組む機会を増やした。 △繰り返し基礎・基本問題に取り組んだが、配慮を要する子供の学力を向上させることが、十分にできなかった。 ○総合的な学習の時間で学んだことをリーフレットやポスター、動画などで他者に伝えたり、学習発表会で発表したりすることができた。 △自主的に家庭学習に取り組む子供は増えたが、十分に取組めていない子供もいる。	A B B B	・自己評価は上方修正すべきである。 ・自分の考えを式や図、文章でノートに整理させ根拠を明らかにする事は、大切なで全学級でできるようにしてほしい。 ・基礎基本を定着させる「みなとタイム」はとても大切な取組なので、引き続き充実させて欲しい。 ・タブレットの活用や個別指導など創意工夫がたくさん見られた。 ・家庭学習は、子供だけではなく、家庭環境にも大きく左右されると思う。低学年のうち習慣がつくように家庭への働きかけが大切だと思う。 ・児童の家庭学習については、いろいろな問題をかかえていると想像できる。学校の先生方の努力だけでは解決できないこともあると思う。	・重点目標の達成に向けて、算数科の学習を中心に考えをつくることは、できるようになってきた。次年度は、学級経営を基盤として、話を聴くこと等の学習規律の徹底と自分の考えを説明する活動を全校で取り組んでいく必要がある。 ・「みなとタイム」の設定と活用は定着してきたので、次年度も複数体制で指導に入り、タブレットドリル等を活用して、基礎・基本的な問題をクリアできるようにしっかり取り組んでいく。 ・家庭学習について、家庭での理解、協力の上に、タブレットドリル等の活用を工夫して子供が取り組みやすいような内容を検討していく。 ・総合的な学習の時間について、発信方法などを工夫し、さらに充実させる。		
	認め合い、助け合える子供	⑤ ⑥ ⑦	生活規律目標を定めた「7つの目標」の中で、特に挨拶、丁寧な言葉遣い、返事の指導の徹底を図る。 「感謝・思いやり」の心を育てるために、道徳科の授業づくりを充実させ、重点項目を設定する。 心を通わせることで感謝や思いやりの気持ちをもちあわせるために、異学年との交流(メルシーアーチ、笑顔郵便)を実施する。	○「職員アンケート」の成果指標 平均3.0以上(4段階) ○「児童アンケート」の成果評価 平均1.4以上(2段階) ○職員による教育活動評価「道徳科の授業づくりを充実させ、思いやりや感謝の心を育てる」平均3.0以上 ○「児童アンケート」の成果評価 平均1.4以上(2段階) ○生活アンケート「友達との関係」に関する児童の評価 1.4以上(2段階評価)	3 3 3	○児童会の挨拶運動の取組を通して、3Sの挨拶が浸透していった。 △言葉遣いが十分に身に付いていない子供へは、家庭と連携し、指導をしていく必要がある。 ○道徳科の授業づくりを工夫したり、子供のノートへコメントを書いたりする教職員が増えた。 ○メルシーアーチ、笑顔郵便等で友達と関わらせたり、感謝の気持ちを伝えたりする活動を児童会を中心にすることができた。	B B B	・自己評価は上方修正すべきである。 ・児童会と職員によるあいさつ運動は、1年間で効果が表れてきている。 ・きちんと立ち止まって、お辞儀をして挨拶をする子供が多くなった。校内でもしっかり挨拶ができる子供が増えてきた。 ・登校時、異学年の児童と笑顔で会話をしながら歩く子供の姿に、道徳科の授業づくりの取組も一因として考えられる。今後も、授業改善を行いながら、継続してほしい。	・「あいさつ運動」のように、学校全体で共通して取り組んだり、振り返りの活動を文章化したり、成果を可視化した取組は、有効であるので、次年度も「心の部」が中心になって推進していく。 ・メルシーアーチや笑顔郵便等は、異学年での関わりや、児童会が主体となって認め合ったりするよい機会となっているので、これからも目的を意識させ、継続していく。 ・今後も授業研究等を通して、道徳科の授業づくりを工夫する。		
	自分のめあてに向かって努力し続ける子供	⑧ ⑨ ⑩	生活規律と学習指導に関する取組を称賛することで、非認知能力を高めていく。 学級経営案をもとに、学期毎に生活面や学習面における適切な目標を設定させ、目標を意識して生活させる。 朝の活動の時間「スポーツタイム」において、長縄跳び等の運動に取り組ませる。	○「職員アンケート」の成果指標 平均3.0以上(4段階) ○「児童アンケート」の成果評価 平均1.4以上(2段階) ○「職員アンケート」の成果指標 平均3.0以上(4段階) ○「児童アンケート」の成果評価 平均1.4以上(2段階) ○「職員アンケート」の成果指標 平均3.0以上(4段階) ○「児童アンケート」の成果評価 平均1.4以上(2段階)	3 2 4	○子供の良さを見つけて、しっかり認めることを意識して指導をしていく教職員が増えた。 △子供に立てさせる目標については、日常的に振り返りをさせて、意識させる必要がある(学級間格差が見られる)。 ○計画的にスポーツタイムを運営し、前回との比較で伸びたところを校内放送する等、子供達へのよい意欲付けになった。	A B A	・自己評価は適切である。 ・学年の実態に合わせて、低・中・高学年毎に具体的な目標を示してあげた方が、子供が意識して目標達成に取り組むと考えられる。 ・学級に掲示してある個人の目標は、ただ単に○等を記入する簡単な評価よりも、1ヶ月を振り返ってしっかり記述させた方が、意識化できると考えられる。 ・スポーツタイムの伸びた回数を放送する取組は、よい意欲付けになっているので、継続してほしい。	・学習や生活の規律に関しては、低・中・高学年でめざす目標を設定し、子供に月末に評価させて、3部会で来月の共通実践項目と手立てを吟味して、実践を重ねていく必要がある。 ・「みなとタイム」を活用して、今月の反省と来月の目標をしっかり記述させて、意識化を図っていく必要がある。 ・「スポーツタイム」は長縄跳びにも慣れたきたので継続しつつ、他のスポーツでの取組も考える。		
	いじめの未然防止やいじめ問題の解消	⑪ ⑫ ⑬	各種アンケートや細かな児童観察によるいじめの早期発見(見逃し0)、早期対応を確実に行う。 「いじめ防止対策委員会」による全職員での情報共有を行う。 児童の悩みを丁寧に聞き取り、不安解消に向けた取組を組織的に行う。	○生活アンケートと面談の実施率 100%(毎学期) ○いじめ防止対策委員会の実施率 100%(毎月) ○いじめチェックリストの実施率 100% 認知したいじめの解消率 100%	4 4 4	○生活アンケート結果を基に子供と面談し、丁寧に関き取りを行うことができた。 ○「いじめ防止対策委員会」を開催し、配慮を要する子供について、全職員で対応等について共通理解を図ることができた。 ○チェックリストを活用し、子供の変化を見逃さないように努めた。見つけたいじめについては、連携して対応し、事後指導にも努めた。	A A A	・自己評価は適切である。 ・丁寧には、判断が難しいいじめもあると思うので、引き続き子供の心に寄り添った取組をして欲しい。 ・いじめの発見解決は困難な作業である。児童心理の専門家が対応するのがベストだと思う。 ・いじめ・不登校の問題などの生活指導は、先生方の勤務時間に大きく影響していると思う。一定基準を設けて、基準を超えたら、外部機関に支援してもらおうとも考えた方がいい。	・いじめについては、個別に丁寧に対応していく。 ・いじめチェックリスト等を活用し、気になる項目や前回から大きな変更等がある場合は、組織的に対応するようにする。 ・次年度も生徒指導委員会やSSW、SC、子ども家庭課等と支援チームを結成して、加害者・被害者の心のケアや対応の仕方等連携して、継続して行っていく。		
	不登校の未然防止と不登校の解消	⑭ ⑮ ⑯	「福岡アクション3」に基づいた全教職員による実践を徹底する。 「子供を見つめる会」による全職員での情報共有と、マンツーマン対応等による組織的対応を行う。 不登校・兆候児童を減らすため、スクールカウンセラー(SC)、スクールソーシャルワーカー(SSW)、関係機関との連携を密に取り、対応を協議する。	○「福岡アクション3」に基づいた児童への指導、支援の実施率 100% ○子供を見つめる会の実施率 100%(毎月)生徒指導担当を中心にしたきめ細かく組織的・継続的な対応の確実な実施 ○不登校・兆候児童数 前年度比2割以上減	4 4 3	○福岡アクション3に関する共通理解がなされ、それにより、どの教職員も支援を行うことができた。 ○子供を見つめる会は、毎月実施して、配慮を要する子供の共通理解を図り、きめ細かな指導を行うことができた。 ○管理職、主幹教諭、担任、養護教諭、SSW、SCにおいて組織的に対応することができた。 △連携を十分に図ることができなかった家庭と信頼関係を築いていく必要がある。	A A A	・自己評価は適切である。 ・今後も宅峰中学校区内でのSC及び養護教諭と連携しながら、配慮を要する子供の情報を共有し、対応をしっかり行っていく。 ・不登校の子供が、前年度比で5名も減っているのは、大変すばらしいことだと思う。このまま校内支援体制及び外部機関との連携をしっかり行っていく。 ・不登校の理由が多様化してきており、子供や家庭の実態を情報として共有し、対応チームで連携・継続的に対応してきた。SCやSSWやその他の機関とも連携して対応してきた結果、不登校の子供が減ったので、次年度も継続して、組織的に対応していく。 ・不登校になってしまったからの対応だけではなく、楽しい生活・学級づくりに努めていく。 ・宅峰中学校区内での情報共有は、早期対応に大変有効であるので今後も継続していく。			
	教職員の適正な勤務と勤労意欲の向上	⑰	定時退校日(水曜日)と、退校時刻(18時00分)の確実な実施を行う。 放課後の会議等を見直し、職員の裁量時間を確保する。	○業務と自己研鑽の違いを共通理解した上で、超過勤務45時間内の達成率 50%以上(毎月) ○超過勤務時間の平均削減 4月比の10%削減(通年)	3	○水曜4校時も会議や研修を精選して、学級事務をする時間を生みだしたり、学年や校務分掌の仕事について話し合ったりすることができた。 ○超過勤務は、5月が平均6.6、1時間だったが、11月は5.6、1時間に減った。	A	・自己評価は適切である。 ・超過勤務が、5月と11月で平均して1.0時間減っていて、4.5時間以上の職員が減っていることは、成果といえる。 ・もっと職員同士の連携を図り、得意分野を仕分けして、校務を効率的に行う等の取組が必要である。 ・職員の協働意識を高めて、今後も働き方改革に取り組んでほしい。	・退校時刻を設定し、意識することで、個人内での働き方を工夫する職員は増えてきたと思うが、若年教員や初めての主任などにとっては、授業の準備をしたり、提案文書を作成したりすることに時間を要することは事実である。管理職等の計画的な声掛け及び支援・指導で効率化を図る。		

◇ 評価について
 ・【自己評価】 4:目標達成(90%以上) 3:ほぼ達成(70%~90%) 2:もう少し(60%~70%) 1:できていない(60%未満)
 ・【学校関係者評価】 A:自己評価は適切である B:自己評価は上方修正すべきである C:自己評価は下方修正すべきである

令和6年度 学校評価報告書

評価計画			自己評価		学校関係者評価		改善計画	
領域	評価の観点	評価指標(①取組指標または②成果指標)	評価	結果(成果○と課題△)	評価	コメント	次年度における改善策(案)	
総合的評価	教育課程 学習指導	特色ある教育課程の編成と実施 (質的・量的)	週指導計画案や授業参観を通じた教育課程の実施状況(時数・内容)の確認・自己評価・指導	4	○校内研究をもとに自分の考えをつくる授業づくりができた。	A	・学校の評価は適切である。 ・教職員の意識向上を図られ、授業改善が行われている。 ・今後の習熟度学習で、子供の基礎学力が伸びることを期待する。	・教職員同士で授業を見合う機会を本年度の2倍にして、めざす子供像を明確にし、単元で子供を育成する授業づくりを活性化させる。 ・年度当初から、算数科における習熟度別学習を推進していく。
		学習指導法の工夫とその改善	めあてからまとめまでの児童の思考の流れに沿った授業の実施	3	△子供が自分の考えを相手に分かりやすく説明する授業づくりを行う必要がある。	A		
			習熟度別少人数指導の体制づくりと実践	3	△等質ではなく習熟度別学習を推進していく必要がある。	A		
	生徒指導	配慮を要する児童の早期発見・早期対応 問題行動等の未然防止と組織的対応 「支える」生徒指導の推進	毎月の「子供を見つめる会」の実施と生活アンケートを活用した児童実態の把握及び共通理解	4	○全学年の配慮を要する児童の把握、共通理解ができた。	A	・学校評価は適切であるが、一部上方修正箇所がある。 ・全職員で配慮を要する子供について共通理解を図ることは今後も継続してほしい。 ・管理職等の負担軽減のためにも、3部会の活性化を期待する。	・管理職・主幹教諭がアドバイザーになって、各部の担当者が、学校生活におけるめざす子供像を明確にし、育成のための手立てを吟味する。 ・部を中核にして、PDCAサイクルで共通実践を効果的に行うようにする。
			生徒指導部を中心とした組織の明確化と報告・連絡・相談の体制づくりと機能化	2	△生徒指導部が十分に機能せず、管理職・主幹教諭も入り、チームで連携して対応する必要があった。	B		
			「自己存在感」「自己決定」「共感的人間関係」「安全・安心な風土の醸成」を通じた自己指導能力の育成	3	○自分で適切に判断して行動できる子供が増えてきた。	A		
	保健管理	保健管理体制の充実 病気や怪我などの予防	保健管理の確実な実施と事故及び災害発生時の迅速な対応	3	○毎日子供の出席状況を朝の内に確認、欠席者に連絡を行った。	A	・学校の評価は適切である。 ・大雨の時の引き渡し方法が、改善されたので、保護者や子供の負担軽減になった。	・本年度、全面改定した危機管理マニュアルの共通理解をするための機会を増やすとともに、実践に繋がる研修を仕組む。
			緊急を要するときの全職員での組織的で早急な対応と確認(危機管理マニュアルの共通理解)	3	○緊急時には、素早い対応と確実に連絡、報告を行い共通理解できた。	A		
	安全管理	校内の安全管理 安全に関わる職員・児童の意識の向上	毎月の安全点検の確実な実施と迅速な対応	3	○毎月確実に安全点検を行い、補修が必要な場所は、迅速に対応した。	A	・学校の評価は適切である。 ・定期的な点検がきちんと組織的に行われている。	・定期的な安全点検と複数人数での確認を次年度も継続して行う。 ・緊急時の対応のために、集団下校を月1回実施する。
			年間3回の避難訓練の実施 年間1回の防犯教室・交通教室の実施	3	○避難訓練の時には、子供は、真面目な態度で取り組むことができた。	A		
	特別支援教育	児童の正確な実態の把握と個に応じたきめ細やかな支援	特別支援教育校内委員会及び全体会での共通理解と個に応じた適切な指導の実施	3	○特に本年度、支援が必要だと感じた子供については保護者への説明により個に応じて支援につなげることができた。	A	・学校の評価は適切である。 ・今後も養護教諭、SC、SSW等との定期的な情報交換会が大切で継続してほしい。	・特別支援教育支援員との打ち合わせを確実にやり、個に応じた支援を継続して行う。
			・特別支援学級、通常学級との交流教育の実施 ・個別の支援計画及び個別の教育指導計画の作成					
	組織運営	校務分掌(校内組織)の明確化と機能化 会議の効率化と職員の情報共有	3部会のリーダーシップが活きる管理職の支援体制の構築	2	△3部会の中核になる教職員の育成が課題である。	B	・上方修正しても良いと考える。 ・今後のミドルリーダーの育成に期待する。	・3部会のリーダーを中心に確実なPDCAサイクルの実施と成果が可視化できる取組の工夫を行う。
			校内LANを活用した情報ネットワークの推進	3	△効率よく活用できる情報ネットワークを構築する必要がある。	A		
	研修	校内研究テーマの取組の日常化 校外研修・自主研修への積極的参加	基礎基本の定着と学びの手ごたえを実感する児童像の工夫	3	○校内研究テーマに合わせて、振り返り活動を仕組むことができた。	A	・学校の評価は適切である。 ・組織的に共通理解をして、同じ土俵で研修を行うことも必要であるが個人が自己研鑽を積み上げていくことが大切である。	・校内研究テーマに合わせた授業実践及び相互参観を行う。 ・自己のキャリアステージを意識させ、主体的に研修を受けるように促す。
			キャリアステージに沿った年1回以上の参加	3	△キャリアステージに照らして、主体的に研修を受けられるように道筋を定期的にしていく必要がある。	A		
	教育目標 学校評価	児童の実態に基づいた単年度重点目標の設定 全職員による学校評価参画	重点目標の定期的な振り返り(PDCA)	3	○納得のいく資料を提示して、教職員自らが評価改善をする工夫が必要である。	A	・学校の評価は適切である。 ・評価のための評価にならないように、内容の精選を意識されると、より効果的になる。	・児童と保護者、教職員アンケートの内容を吟味して、PDCAサイクルを効果的にできるように学校評価のスリム化を図る。
			年3回の教育活動評価・自己評価の実施	3	△評価のスリム化が必要である。	A		
情報提供	保護者・地域への情報発信	学校・学年便り等の定期的な発行とメッセージボードによる情報提供	4	○学校・学年便り、「Mボード」により、情報を発信することができた。	A	・学校の評価は適切である。 ・今後も、学校の情報をMボードで情報発信して行って欲しい。 ・今後も継続して、情報の共有を定期的に行ってほしい。	・学校・学年だよりやこまめな「Mボード」の配信を継続する。 ・次年度も主任児童委員との会議による地域での子供の情報を共有する。	
		授業参観、PTA各種会合、民生委員・児童委員会等での情報提供	4	○民生委員・児童委員の方々と毎月話し合うことで、情報を共有し、指導に活かすことができた。	A			
保護者・地域との連携	宅峰中・近隣保育所・幼稚園との連携の充実 保護者・地域住民との連携、信頼関係づくり	宅峰中学校区小中連絡会の設定(年5回)	4	○宅峰中学校区小中連絡会で連携して、指導に活かした。	A	・学校の評価は適切である。 ・今後も連携を密にして、9ヶ年間で児童・生徒の育成に努めてほしい。 ・学校行事に何度も招待されたので、学校を身近に感じた。	・コミュニティースクールの本格的実施なので、本年度以上連携を密にして、推進を図れるようにする。 ・今後も、学習発表会等の学校行事を保護者だけでなく地域の方へ幅広く解放できるようにする。	
		保育所、幼稚園等からの情報収集 地域行事への積極的な参加及び学校行事への招待	4	○学校行事への招待及び教育支援を保護者や地域の方にしていただいた。	A			
教育環境整備	教室、特別教室、運動場等の効果的活用と整備 教材・教具、図書、教育備品の整備	学校施設、設備の活用状況と整備状況の確実な把握	4	○安全点検を含めて、必要な場所は素早く整備することができた。	A	・学校の評価は適切である。 ・安全点検と整備は、今後も引き続き行ってほしい。	・今後も教室等の環境を整えていく。 ・今後も、タブレットドリルの活用などタブレットの利活用を推進していく。	
		教材・教具、図書、教育備品の整備状況の確実な把握	3	△教材室の教材教具の点検を授業に活かしていく必要がある。	A			

◇ 評価について ・【自己評価】 4：目標達成(90%以上) 3：ほぼ達成(70%~90%) 2：もう少し(60%~70%) 1：できていない(60%未満)

・【学校関係者評価】 A：自己評価は適切である B：自己評価は上方修正すべきである C：自己評価は下方修正すべきである